

内海 裏方のひと―北野博美伝③

裏方のひと―北野博美伝③

内海 宏 隆

4 検証作業③ 新聞記者時代

「高崎年譜」の第三項には「従兄滝沢豊（朝日新聞社福井支局長）により、一四、五歳より新聞記者生活に入り云々」とある。筆者は朝日新聞社福井支局に、明治40〜41年ころ《北野博美》が在籍したかどうかの確認を

とった。電話で問い合わせたところ、福井支

局の吉田さんはまず「朝日新聞社大阪本社通

信部史」(昭和52年発行)の「同人名簿」の

「明治35年〜大正5年まで」のコピーをFAX

Q2 滝沢豊が朝日に入社したのはいつのことですか。

Xで送ってくださった。「明治時代の名簿は

Q3 滝沢豊が朝日新聞社福井支局長に就任

明確でない」という断り書きがあったが、は

Q4 同人名簿では大正3年まで内地通信員

たして『北野博美』の名前を見つけることは

福井の欄に土生彰の名前があり、翌4年より

できなかった。滝沢豊の名前ですら大正4年

滝沢豊の名前があります。この大正4年を滝

(1〜12月)の「内地通信員」の欄にようや

沢が支局長に就任した年と考えてもよいでし

く掲載されている始末である。明治45年(7

月1日)以降大正3年(1〜7月)「内地通

信員」の(福井)の欄には土生彰という名前

死亡したとのことです。

が掲載されている。新たに出て来た疑問点も

Q5 明治40〜41年頃のローカル記事で北野

含めて再度、朝日新聞社福井支局にFAXを

博美・博美生・ヒロミ生・北野文次郎などの

送った。(左記文面)

署名記事はございませんか。

朝日新聞社福井支局吉田様

ご迷惑をおかけして申し訳ございません。

早速対応して下さってありがとうございます

日本民俗学勃興期を支えた北野博美は重要な

た。同人名簿に北野文次郎(博美)の名前を

人物であるにもかかわらず伝記未詳な部分が多

確認することはできませんでした。その他い

くつかお聞きしたいがございます。よろ

しくおとりなしのほどお願い申し上げます。

攻玉社中学・高等学校 内海 宏隆

Q1 朝日新聞福井支局の開設はいつのこと

これに対するFAXによる返事は左記の通り。

FAX送信のお知らせ

攻玉社 内海宏隆様

メッセージ お問い合わせの質問ですが、こ

ちらの支局では社史を調べることができませ

るので、ご期待にそえるお答えを出すことは

不可能です。わかる範囲で答えさせていただきます。

なお、大阪本社総務部人事課にお問い合わせ

いただく、こちらの支局よりは詳

しい内容がわかるかもしれません。大阪本社

代表電話番号(省略)人事課内線電話番号

(省略)

朝日新聞福井支局 吉田

A1 福井支局の開設はということですが

(FAX NO6)の県別の小史によりま

す、通信員が配置されたのが、明治20年とい

れたのは間違いないと思われまゝ。
 A5 明治40〜41年頃には地方版というのがまだありませんでした。大正2年にローカル情報「北陸だより」が発信され、大正4年になって初の地方版「北陸版」が夕刊に登場したということです。

そこで朝日新聞社大阪本社総務部人事課に電話による問い合わせをしたところ以下のことがわかった。滝沢豊は明治41年までは福井新聞社に在籍し、朝日新聞社に移ったのは翌42年のこと。滝沢豊はその時点で嘱託の通信員であった。大正9年専属の通信員となり、大正11年から没年である昭和10年まで通信部主任を務めた。福井支局長を務めたことはなかったとのこと。《北野》に関しては全く解らなかったが、当時の新聞記者は自分のポケットマネーで情報を仕入れるために何人かの記者を雇っていたこともあったから、《北野》はおそらくそういった感じで滝沢に仕えていたのではなかったか、ということ。
 では福井新聞社の方で実際に《北野博美》が記者生活をしていった痕跡があったかどうか

内海 裏方のひと―北野博美伝③

というところ不明である。福井新聞社社史編纂室の武藤公輔さんに電話で問い合わせをしたところ、現在「福井新聞社百年史」を編纂中であるが現在の時点でそのような事は見当たらないということだった。調べてはみるがなにも福井は第二次大戦の際に大空襲にあつてゐるし、福井地震にも遭遇してゐるので資料の大半が消失・紛失してしまひその復元に現在もたいへん手間取つてゐることだった。武藤氏も「北野はおそらく『坊ちゃん』と呼ばれた記者の雑用係・下働きであれば公的な記録に名を残すことはないから痕跡があつたかどうかを確かめるのは難しい」と推察された。つまり福井新聞社の方で《北野》の新聞記者時代の裏を取る材料は今のところ、ないということだ。

《北野》が一四、五歳ころに新聞記者生活をしてゐたという事実は結局掴めぬままである。しかし仮にそれが事実でなかつたとしても細部ではあるが「高崎年譜」を一部修正する必要がでてくると思う。即ち《北野》が新聞記者生活に入つた一四、五歳という年齢か

らするとその時分は明治40〜41年ということになる。その時期滝沢豊は福井新聞社の記者をしてゐたわけだから、「従兄滝沢豊（福井新聞社記者・のちに朝日新聞社福井支局通信部主任）云々」と。
 前出・「性之研究」掲載のエッセイ「内證ばなし―親しみ深き會員諸君へ」の別の箇所には次のような記述がある。

（前略）私は馬鹿ではない。私はさう信じてゐる。私だつて満更儲ける術を知らない譯ではない。同じ雑誌を出すにしても、もつと賣れる雑誌を作ること位は知つてゐる。寧ろその方ならば下手といふよりも上手な婦人雑誌の編輯者位の手腕は持つてゐる積りである。たゞどういふ譯か今の私は苦しみながらもそんなことが支度くないと思つてゐるのである。

「もつと賣れる雑誌を作ること位は知つてゐる」「上手な婦人雑誌の編輯者位の手腕は持つてゐる積り」とという言葉から伺える《北野》の自信・自負はどこからくるものなのだろうか。おそらく後年本人が高崎正秀に向か

つて語ったところの「一四、五歳ころから」叩き上げた「新聞記者」体験などがそういわせているように筆者には思えるのだ。

またもう一つ注目してよさそうな情報を前出・加藤實さんから得ることができた。実は加藤實さんの父上Ⅱ吉田元Ⅱ《北野博美》・滝沢豊兩人にとって従兄にあたるひとも朝日新聞社大阪本社の記者であり、「新聞記者」としてニュースに我が国で初めて速記を取り入れた人」だったということなのだ。後年、折口の口述筆記者として、『民俗芸術』を初めとする多くの雑誌編集者として活躍することになる《北野博美》の下地・素養といったものはこうした年上の従兄たちの影響を大なり小なり受けたものではなかったかと思われるのだ。

これも後日談であるが、北野晃氏より二つの資料提供を賜った。昭和48年に臨川書店より「年中行事」が復刊された際に作られた内容見本である。その中で推薦のことを当時国学院大学教授高崎正秀、成城大学教授大藤時彦、早稲田大学教授本田安次の三人が寄せ

ている。高崎正秀は「北野博美大人と『年中行事』のことゝも」と題して千字程度で北野博美の人物を語っている。その内容はほぼ「高崎年譜」に一致するものだが、注目すべき点は「年十六歳福井新聞に入社、社会部記者として活躍」という一節にある。「高崎年譜」に「十四、五歳より新聞記者生活に入り」とあったことから明治40〜41年の間はか

りに気をとられていた。明治26年生まれの高崎が十六歳のときは明治42年にあたる。これは滝沢豊が福井新聞社から朝日新聞社に移った年にもあたる。ひよっとすると福井商業学校中退のち「坊ちゃん」として「十四、五歳より新聞記者生活に入り」（「高崎年譜」記述）滝沢豊の福井新聞退社にもなつて十六歳の時正式に「福井新聞社会部記者」として採用されたのかもしれない。（註11）（あ

とは福井新聞記者としての業績が当時の新聞記事の中からみつけられれば裏がとれるのだが残念ながら未見である。）もう一つは帝國聯合青年會発行の月刊雑誌『斯論』（第一巻第六号 大正6年10月）に掲載された北野文次郎の小説「それが事實なら」のコピーであ

る。「今年二十五歳になる」主人公「彼」が半生を振り返るといふスタイルをとった「創作」だが多分《北野》自身の姿が投影されているものと思われる。いくつか場面を拾ってここに紹介したい。

- ①「十七歳の秋」「彼の一家は思わぬ失敗に遭遇して彼等三人はその日の生活にさへ苦しまなければならぬ境遇に陥った」「止むなく彼は彼等を助くべく土地の新聞社に入った」
- ②「二十二歳の春」「彼にとつては誰れにも代えがたいと思ふほど愛して居た母が僅か十日許りの病きで亡くなつた」「母の靈前に供へてあつた香奠の金を掴んで走つた」「かくて彼はその年の夏の初め不義の借財と一人の父を残して飄然故郷を去つたのであつた」
- ③「彼はその年（二十二歳）の暮も押詰まつた三十一日、東京にある友を頼つてそのおちぶれた姿を自白の停車場に洒した」
- ④「彼が東京で或る雑誌社に職を求め得たのは翌年の四月であつた」

それぞれの年齢を数え年のこととして換算

すると「土地の新聞社に入った」「十七歳」明治42年(満16歳)、出奔・上京の「二十一歳」大正3年(満21歳)、「東京で或る雑誌社に職を求め得た」「翌年」とは大正4年(満22歳)のこととなる。(物語における「現在」彼の年齢は二十五歳と設定されているが、明治26年生まれの《北野》にとってこの雑誌の刊行された大正六年がまさに数えの二十五歳にあたる。)①は「高崎年譜」「父の士族の商法―機織業の失敗により県立福井商業学校中退」「新聞記者生活に入」という部分に相当する。(但し年齢的に一、二歳の差がある。)創作という形態をとっている以上慎重を期さねばならぬ点もあるが、「高崎年譜」「北野博美大人と『年中行事』のこと」も(前出)の叙述や『秋田雨雀日記』の記述(註12)などと併せて考えてみると合致する点も多く見られ、『北野』の青春時代を物語る有力な裏付け資料と見なしでもよいと思われる。

5 結びにかえて

以上見てきたように北野博美の生涯、特に出自・少年時代については甚だ不明な点が多

い。今後も福井が生んだ日本民俗学蔭の功勞者北野博美について更なる調査研究を続け北野の伝記ならびに日本民俗学草創期の歴史をより明らかなるものにしていかなければならないと思っている。北野の郷土・福井で活躍の先学諸賢のご教示・ご鞭撻を切に願いつつひとまずこのレポートを終わりたい。

註

10 北野晃氏より「変態心理」第14巻第2号に「明42、エンピツ刷り役の小記者は、一七才のとき福井市の南五里、栗田部という山村に一夏籠って勉強した」という内容の記事があるという。指摘を受けた。明治42年北野は一六歳であり、晃氏が「一七歳」とおっしゃるのはおそらく数え年でのことだろう。

11 昭和59、60年にかけて福井新聞記者・和田稔が『福井新聞』に連載した「明治ふくい新聞録」(第92回)をみると以下のような記述がある。(明治42年)当時の福井新聞編集局の顔ぶれを調べると土生主筆、嶋島曉村、藤田村雨、橋本喜代治、近藤泥牛、伊藤双岳、野村啓次郎、日野善翠、大倉の九人となる。北野博美の名前はそこにはない。北野はやはり下働きの「坊ちゃん」であったのか。あるいは明治26年1月28日生まれの北野にとつて翌年の1月27日までは16歳だったわけだから、「社会部記者」本採用は

明治43年1月の出来事であったのかもしれない。大正4年2月20日「晩、佐藤、倉若、北野君らと入浴。」の記事で北野の名は初めて登場する。翌5年1月31日には「実業世界へゆき、北野君。安成君にあい、云々」という形で北野の名を見かける。これらの記事から、大正4年初頭北野は既に上京をはたして(秋田雨雀らとともに入浴するまで呢戀の間柄となつて)おり、またその翌年の五月には「実業之世界」社で働いていた事実を認めることができる。(これらは小説記述の③④に整合する事実である。)

(うつつみ ひろたか)